

# 須木尊塾

H28.11.24(木)

昼夜の寒暖の差に、体がつかいけず、風邪をひきそうな今日この頃です。縮刈りの終わる後の田んぼに、霜が降り始める季節も近いと感じ始めたころです。

## 十二月は人権週間(十二月四日～十日)

今年度養護者から出された年間強調事項は、

- ① 女性の人権を守ろう
- ② 子どもの人権を守ろう
- ③ 高齢者の人権を守ろう
- ④ 障害を理由とする偏見や差別をなくそう
- ⑤ 同知問題に関する偏見や差別をなくそう
- ⑥ アイヌの人々に対する理解を深めよう
- ⑦ 外国人の人権を尊重しよう
- ⑧ ケータイ感染者やハンセン病患者等に対する偏見や差別をなくそう
- ⑨ 刑を科せられて出所した人に対する偏見や差別をなくそう
- ⑩ 犯罪被害者とその家族の人権を配慮しよう
- ⑪ インターネットを悪用した人権侵害をなくそう
- ⑫ 北朝鮮当局による人権侵害問題に対する認識を深めよう
- ⑬ ホームレスに対する偏見や差別をなくそう
- ⑭ 性的指向を理由とする偏見や差別をなくそう
- ⑮ 性別同一性障害を理由とする偏見や差別をなくそう
- ⑯ 人身取引をなくそう
- ⑰ 東日本大震災に起因する偏見や差別をなくそう



あらためて、いろいろな視点があることに気づきました。実は、十九日(土)に、いのちをいたたくの本の中に登場する食肉解体作業員の坂本さんのドキュメンタリーを見た。同じ仕事をしていたお母様も本人も職業差別をいじめの標的とされてきたそう。今、坂本さんは命の大切さの講演を

あつちでされてるそうです。そんな钱かきに対して応援していると話されてました。とても心を打たれる番組だったので紹介させていただきます。同じ日に、川林市の読書感想文の表彰式があり、139名の作品の中から「義長賞」に水谷香風さんの作品が選ばれました。人権に関連する内容だったので紹介いたします。

## 大きな勇氣

須木中学校一年 水谷 香風

「もう壊せるものがないよね。」優子がほそりとつぶやいた。物の次は人だ。また、あの重苦しい空気が流れようとしている。」

これは、ある本からの引用文です。中学校に入学して一週間が過ぎた頃、初めて図書室に行つて、本の紹介コーナーにあったこの言葉に、私は思わず立ち止まってしまふほど、引きつけられました。そして、この本を読んだみたいという気持ちになりました。私は、怖い話の本が大好きです。この本も、きつとホラーのような怖い本なんだろうと思いつつそく手に取りました。でも、私の予想とは全く違いました。「温室デイズ」は、学級が崩壊していく話だったので。

読めば読むほど、私は、この本にはまっていきました。不良、いじめ、ひきこもり、私が今までテレビなどで見て感じていた学校のイメージとは違い、一つ一つの出来事が全て印象深かったです。その中でも、特に印象に残ったのは、主人公みちるの正義感と強さです。みちるは、学級崩壊してしまったクラスにちゃんとした学校生活を取り戻そうと、みんなの前で呼びかけます。そして、そのことがきっかけで、いじめにあうようになってしまいます。誰からも話しかけられなかったり、バッグや制服が切り刻まれたりというようなひどいいじめが五ヶ月もの長い間続きました。けれどもみちるは、そんないじめに負けず、最後までクラスが普通のクラスに戻る事を信じていました。この本を読みながら、私にはできないことをしているみちるは、とても強い人だと思いました。自分がいじめられるかもしれないと思ながらも、クラスのために行動できるということは、大変な勇氣がいることです。私には、いじめられるのを覚悟しながらみんなのために呼びかけることなんてとてもできません。みちるが受けたようなつらいいじめに耐える強さもありません。今の私には、授業中に積極的に手を挙げることで、勇氣

のいることなのです。



けれども、このままではいけないということを、みちるが教えてくれました。誰かが困っているとき、助けを求めているときに助けてあげられなかったら、その後ずっと罪悪感を抱きながら、後悔しながら生きていかなくてはなりません。そんな思いをしなくてもいいように、私は自分を少しづつ変えていこうと思えました。まずは、授業中に積極的に手を挙げることに、困っている人に、手伝えることはいかと思えました。と、そんな身近なことから自分を変えていく努力をしたいと思えました。

この本には、学級崩壊したクラスの女の子が出てきます。リストカットとをしている私と同じ中学一年生の女の子が出てきます。リストカットとは、頭の中がむしゃくしゃしているときに手を切ってしまうという心の病気だそうです。自分の身体を自分で傷つけるという女の子の気持ちは、私には想像もできないくらい怖いものではないかと思えます。私は将来、養護教諭になるのが夢です。養護教諭の仕事は、ケガや病気の生徒の手当てをするだけではありません。生徒の悩みを聞いてあげたり、暗い気持ちになっている生徒をほげましてあげたりするのも、養護教諭の大切な仕事だと思います。世の中には、この本に出てくるリストカットの女の子のように、いろいろな悩みや心の病気を抱えている子どもたちがたくさんいると思います。私は、養護教諭になって、そんな子どもたちが相談しやすい環境をつくり、いろいろな話をしてあげたいと思っています。

この本を読んで私は、知らなかった世界をたくさん見ることができました。いじめの本当の怖さや心の病気で自分の身体を傷つけてしまう人がいることなど。もしかししたら、私の学校にも、悩みを抱えて一人だけ苦しんでいる人がいるかもしれません。もし、そんな人が私の身近にいたら、どんな小さなSOSにも気づいてあげられるような人になりたいと強く思いました。そして、今の私にできることがあれば、何でもしてあげたいです。

私は、この本に出会ってなかったら、自分が正しいと思った事が、他の人と違ったとしても、意見を言えていなかったかもしれません。しかし、この本と出会って、大きな勇氣を踏み出す一歩となりました。常に、このこのことを思いながら、積極的に自ら行動していきたいです。

振り返ると私にも記憶に残る三冊の本があります。小学時代の『黒島物語』、中学時代の『知覚』、中学時代の『百鬼の昼と千鬼の夜』。ジャンルは違いますが、今思えば、命に関わる本です。生きていくという事があり、二枚から子どもたちが進む未来は、もっと変化の大きな時代となるでしょう。学校でも人権教育の推進を図っていきます。